

- 問1 弥生時代には大陸から青銅器と鉄器の技術が伝わりました。鉄が主に武器や工具として利用されたのに対し、青銅器である銅鐸は、時代が進むにつれて大型化していきました。このような変化を遂げた銅鐸は、当時どのような目的で使われていたと考えられていますか。 (2021年 大阪府公立入試 類似)
1. 稲を効率よく刈り取るための実用的な工具
2. 集落を外敵から守るための鋭利な武器
3. 豊作などを願うための祭祀の道具
4. 大陸との交易において価値の基準となる貨幣
- 問2 中国の歴史書には、紀元前1世紀頃から1世紀頃にかけての倭（日本）の様子が記されています。これらの記述についてまとめた次の説明のうち、最も適切なものはどれですか。 (2023年 大分県公立入試 類似)
1. 『魏志』倭人伝には、倭の王が初めて中国の皇帝に朝貢し、大陸の進んだ青銅器文化を日本へ持ち帰ったことが記されている。
2. 『漢書』地理志には、倭人が100余りの国に分かれて生活し、定期的に朝鮮半島の楽浪郡へ使節を送っていたことが記されている。
3. 『後漢書』東夷伝には、卑弥呼が30余りの国を従え、魏の皇帝から「親魏倭王」の称号を授かったことが記されている。
4. 『漢書』地理志には、奴国の王が後漢の光武帝から金印を授かり、中国との交流を深めたことが記されている。
- 問3 弥生時代に大陸から稲作が伝わり、食料を蓄えることが可能になったことで生じた社会の変化について、最も適切な説明を選んでください。 (2021年 神奈川県公立入試 類似)
1. 表面に縄目の文様がある、厚手で黒褐色の土器が全国的に作られるようになった。
2. ナウマン象などの大型動物を狩猟するために、人々は移動を繰り返しながら生活するようになった。
3. 土地や水の利用、蓄えた食料などをめぐって、ムラの中で争いが起こるようになった。
4. 政府から農民へ平等に土地が割り当てられ、収穫した稲を税として納める制度が整った。
- 問4 「魏志倭人伝」に記されている、3世紀頃の日本（倭）の社会や政治の様子に関する説明として、当時の状況を正しく述べているものを選びなさい。 (2025年 長野県公立入試 類似)
1. 大人（たいじん）と下戸（げこ）という身分の差があり、租税を納める仕組みがあった
2. 仏教が伝来した直後であり、各地で巨大な寺院の建設が始まっていた
3. 律令制度が導入され、戸籍に基づいて全ての人々に口分田が割り当てられていた
4. 武士団が結成され、各地の荘園を管理するために地頭が派遣されていた
- 問5 縄文時代末期に大陸から北九州地方へ稲作が伝来したことにより、その後の社会の仕組みはどのように変化しましたか。最も適切な説明を選びなさい。 (2016年 奈良県公立入試 類似)
1. 全国で狩猟や採集が完全に行われなくなり、全ての集落が移動をしない定住生活を同時に開始した。
2. 食料の保存が可能になったことで、蓄えの多寡による富の差や、土地や水をめぐる争いが生じるようになった。
3. 大陸との交易が独占されたため、各地の集落が独立したまま争いのない平和な時代が続いた。
4. 米を貨幣として使用する制度がすぐに確立し、中央集権的な国家が全国に一斉に誕生した。
- 問6 中国の歴史書「魏志倭人伝」に記録されている邪馬台国の女王卑弥呼は、当時の中国の王朝である魏に使いを送りました。卑弥呼がこのような外交を行った背景や、その結果として得た称号について述べた文として正しいものはどれですか。 (2026年 大阪府公立入試 類似)
1. 白村江の戦いで協力を依頼するため、皇帝から「日本国王」の称号を授かった。
2. 仏教を日本に広めるための援助を求め、皇帝から「倭王武」の称号を授かった。
3. 大陸の優れた青銅器技術を独占するため、皇帝から「遣隋使」として認められた。
4. 自らの権威を高めるために中国と通じ、皇帝から「親魏倭王」の称号を授かった。
- 問7 3世紀の中国の歴史書である『魏志倭人伝』には、当時の日本（倭）の様子が記されています。それによると、倭ではもともと男子を王としていましたが、国が乱れて互いに攻め合う状態が数年続きました。この混乱を収めるためにとられた歴史的な経緯として正しいものはどれですか。 (2020年 徳島県公立入試 類似)
1. 一人の女性を王として共立し、国をまとめさせた
2. 仏教を国教として導入し、人々の信仰によって乱れを鎮めた
3. 狗奴国の王が武力によって全ての小国を制圧した
4. 中国の魏から派遣された総督が直接統治を行った
- 問8 古代の東アジアにおいて、倭（日本）などの周辺諸国の首長や国王が、中国の皇帝に使者を送り、貢物を捧げた外交形式を何と呼びますか。この形式において、使者は中国の皇帝からその地域の支配権を認められ、称号や金印を授かることで、自らの権威を高めようとしていました。 (2024年 宮崎県公立入試 類似)
1. 通商
2. 冊封
3. 朝貢
4. 民間貿易
- 問9 邪馬台国の女王である卑弥呼が、中国の魏（ぎ）へ使いを送り、皇帝から「親魏倭王」の称号や金印、多数の銅鏡を授かった政治的な背景として、最も適切な説明はどれですか。 (2020年 秋田県公立入試 類似)
1. 魏の優れた律令制度をそのまま日本に導入し、中央集権国家をいち早く確立するため
2. 魏と共同で朝鮮半島の高句麗を攻撃し、領土を拡大するための軍事同盟を結ぶため
3. 魏の後ろ盾を得ることで自らの権威を高め、国内の統治や他国との関係を有利に進めるため
4. 魏の強力な軍勢力を日本に直接呼び寄せ、九州地方の反乱勢力を武力で鎮圧するため
- 問10 中国の歴史書である『後漢書』東夷伝には、1世紀半ばの57年に倭の奴国の王が使者を送り、皇帝から印綬（印と紐）を授かったという記述があります。このとき授けられたとされる「漢委奴国王」と刻まれた金印が、江戸時代に発見された現在の福岡県にある場所はどこですか。 (2023年 大阪府公立入試 類似)
1. 種子島
2. 対馬
3. 壱岐
4. 志賀島
- 問11 弥生時代の遺跡で見つかる特徴のうち、当時の社会において集団間の緊張や争いがあったことを最も直接的に示しているものはどれですか。 (2021年 愛知県公立入試 類似)
1. 収穫した稲の穂を効率よく摘み取るために使用された、平らな石に穴を開けた石包丁
2. 祭祀や宝物として用いられたと考えられる、複雑な文様が描かれた青銅製の銅鐸や銅鏡
3. 湿気やネズミの被害から穀物を守るために、柱にねずみ返しを設けた床の高い建物
4. 集落を二重、三重に囲む深い堀や、尖った杭を並べた逆茂木（さかもぎ）の跡
- 問12 紀元前後の日本（倭）が100余りの小国に分かれていた時代、現在の福岡県付近にあった「奴国」の王が使者を派遣し、皇帝から「漢委奴国王」と刻まれた金印を授けられたとされる中国の王朝を選びなさい。 (2016年 大阪府公立入試 類似)
1. 唐
2. 漢
3. 元
4. 宋

答え合わせ・解説

問1	答え 3 豊作などを願うための祭祀の道具	弥生時代に伝わった青銅器には、銅鐸のほか銅剣や銅矛などがありますが、これらは実戦で使う武器ではなく、主に祭りの道具（祭祀具）として用いられました。当初は内部に「舌（ぜつ）」を吊るして音を鳴らす鐘として使われていましたが、次第に大型化し、地中に埋めたり飾ったりして、豊作を祈る象徴的な役割へと変化していきました。
問2	答え 2 『漢書』地理志には、倭人が100余りの国に分かれて生活し、定期的に朝鮮半島の楽浪郡へ使節を送っていたことが記されている。	紀元前1世紀頃の日本の様子は、前漢の歴史を記した『漢書』地理志に「倭人は100余りの国に分かれていた」と記録されています。一方、1世紀半ば（紀元57年）に奴国の王が金印を授かった記録は『後漢書』東夷伝に、3世紀の卑弥呼に関する記録は『魏志』倭人伝（『三国志』の一部）に記されており、書物と時代・内容を正しく区別する必要があります。
問3	答え 3 土地や水の利用、蓄えた食料などをめぐって、ムラの間で争いが起こるようになった。	稲作が普及すると、生産力の向上により食料の蓄え（余剰生産物）ができるようになりました。これにより、蓄えの多寡による貧富の差や身分の違いが生まれるとともに、稲作に不可欠な土地や水の利権をめぐって集落（ムラ）同士の争いが発生するようになりました。こうした争いを通じて、次第に多くのムラを統合する小国が形成されていきました。
問4	答え 1 大人（たいじん）と下戸（げこ）という身分の差があり、租税を納める仕組みがあった	『魏志倭人伝』の記述からは、当時の倭には「大人」や「下戸」と呼ばれる明確な身分階級が存在し、租税（税金）の徴収や市場での交易が行われていたことが分かります。これは、単なる集落の集まりではなく、ある程度組織化された国家としての仕組みが整い始めていたことを示しています。
問5	答え 2 食料の保存が可能になったことで、蓄えの多寡による富の差や、土地や水をめぐる争いが生じるようになった。	稲作によって収穫された米は、それまでの狩猟・採集による食料とは異なり、長期保存が可能でした。これが余剰生産物としての「富」を生み、それを管理するリーダーの出現や、有利な土地を確保するための集落間の紛争、さらには身分の格差へとつながり、社会の構造を大きく変える要因となりました。
問6	答え 4 自らの権威を高めるために中国と通じ、皇帝から「親魏倭王」の称号を授かった。	卑弥呼は、中国の王朝である魏に使者を送ることで、当時の先進国である中国の皇帝から自らの統治を認めてもらおうとしました。その結果、魏の皇帝から「親魏倭王（しんぎわおう）」という称号や金印、多数の銅鏡などを授かり、その権威を背景に国内の統治を安定させようとしたと考えられています。
問7	答え 1 一人の女性を王として共立し、国をまとめさせた	当時の倭（日本）では、小国同士が激しく争う「倭国大乱」と呼ばれる時期がありました。この混乱を収拾するため、複数の小国が連合し、まじないや宗教的な権威を持つ卑弥呼を女王として立てることで国内の安定を図ったことが『魏志倭人伝』に記されています。
問8	答え 3 朝貢	中国を中心とした国際秩序の中で、周辺諸国の君主が中国の皇帝に対して臣下の礼をとり、貢物を捧げる行為を指します。これにより、周辺諸国の君主は中国皇帝から国内の支配権を正当化する称号（官職や王号）を得ることができました。設問にある「称号や金印を授かること」は、この外交関係に伴う重要な政治的プロセスです。
問9	答え 3 魏の後ろ盾を得ることで自らの権威を高め、国内の統治や他国との関係を有利に進めるため	卑弥呼が魏に朝貢したのは、当時アジアで強大な勢力を持っていた中国の皇帝から「王」として認められることで、国内の他の勢力に対して自分の正当性を示す目的がありました。金印や銅鏡といった贈り物は、その権威を視覚的に周囲へ誇示するための重要な道具として利用されました。
問10	答え 4 志賀島	1784年に福岡県の志賀島で農作業中に偶然発見された金印は、縦横約2.3cmの純金製で、「漢委奴国王」の五文字が刻まれていました。これは『後漢書』にある「建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝貢す…光武、賜うに印綬を以てす」という、後漢の光武帝が奴国の王に印を与えたとする記述を証明する非常に重要な歴史的発見となりました。
問11	答え 4 集落を二重、三重に囲む深い堀や、尖った杭を並べた逆茂木（さかもぎ）の跡	石包丁は農業技術、銅鐸は祭祀、高床倉庫は貯蔵に関する特徴ですが、環濠集落における深い堀や柵（逆茂木）は、純粹に軍事的な防衛を目的としています。吉野ヶ里遺跡などでは、こうした強固な防御施設に加えて、敵を監視するための物見やぐらも確認されており、弥生時代の社会が戦乱の影響を強く受けていたことを物語っています。
問12	答え 2 漢	紀元前1世紀ごろ、倭（日本）は100余りの国に分かれていました。1世紀半ば（紀元57年）には、その中の一つである奴国の王が中国の王朝である漢（後漢）に使者を送り、皇帝（光武帝）から金印を授かりました。この事実は中国の歴史書である『後漢書』東夷伝に記録されています。